

白天目を焼いた窯

瀬戸・美濃の大窯で白天目の出土例が認められる窯は、美濃では小名田窯下窯、瀬戸では上水野地区の昔田窯などがあります。昔田窯はあな窯末期から大窯への変遷が確認できる貴重な窯として知られており、小名田窯下窯と同時代の16世紀前葉に稼働した窯です。

また、御嵩町浦畑遺跡、瑞浪市鶴ヶ城跡、瀬戸市桑下城跡などの消費地遺跡から使用された白天目が出土しています。いずれも城館遺跡などで、武士階級に白天目が珍重されていたことがうかがえます。

青山双溪(青山 双男)(1948—)

多治見市無形文化財「白天目」保持者 平成30年9月25日指定



青山双溪作「白天目」(個人蔵)

青山双溪氏は、国重要文化財の尾張徳川家所蔵「白天目」について小名田窯下窯で焼かれた可能性をさぐり、これまで研究を重ねてきました。白色を呈する陶土の選択、透明性の高い灰釉の配合、紐輪積みロクロ水挽きによる素地の成形を行うことにより、戦国期に瀬戸・美濃窯で焼かれた白天目の技法を再現しました。現在は、再現した技術を発展させ、酸化や還元、引き出しなど焼成方法等を変えることで、「青白陶」や「古白陶」を生み出しています。また、令和2年からは16世紀の大窯を手作りで再現して実際に白天目を焼くなど、さらなる展開を目指し白天目研究を続けています。

白天目に用いられた原料については、土は小名田の白い土で、釉は灰釉と考え、分量や配合を調整して焼成を重ねました。また化学分析も取り入れて研究を進めた結果、土は砂目の多い白い土で、鉄分を若干含んだ粘土と、木灰をまぜたものを釉薬として使用していたことがわかりました。さらに透明な釉中に無数の気泡があることが白天目の条件の一つです。この気泡を伝うように丸形や四角形のさまざまな形の貫入が入っており、これを再現することにも成功しています。



昔田窯出土 白天目(瀬戸市埋蔵文化財センター所蔵)



市内に築かれた「澄心窯」での窯焼き

小名田窯下窯

おなだかましたよう

はじめに

小名田窯下窯がある小名田町地域には多くの古窯跡があり、13世紀代から窯業生産が行われていたことが知られています。また、江戸時代初期に可見の太平から加藤伊右衛門景門が移住して窯を開いたと伝わり、景門が小名田の陶祖とされています。小名田窯下窯は、白天目を作った窯として

昭和初期からその存在が知られており、地元の研究者らによって遺物採集がおこなわれてきました。平成6年度の発掘調査で、16世紀の大窯3基、江戸時代の連房式登窯2基が発見されました。その後、未調査の大窯1基を含む6基と作業場が多治見市史跡に指定されました。中でも小名田窯下1号窯は、安土桃山期以前に作られた窯で、美濃の初期の大窯として知られています。

昭和初期からその存在が知られており、地元の研究者らによって遺物採集がおこなわれてきました。平成6年度の発掘調査で、16世紀の大窯3基、江戸時代の連房式登窯2基が発見されました。その後、未調査の大窯1基を含む6基と作業場が多治見市史跡に指定されました。中でも小名田窯下1号窯は、安土桃山期以前に作られた窯で、美濃の初期の大窯として知られています。

昭和初期からその存在が知られており、地元の研究者らによって遺物採集がおこなわれてきました。平成6年度の発掘調査で、16世紀の大窯3基、江戸時代の連房式登窯2基が発見されました。その後、未調査の大窯1基を含む6基と作業場が多治見市史跡に指定されました。中でも小名田窯下1号窯は、安土桃山期以前に作られた窯で、美濃の初期の大窯として知られています。

昭和初期からその存在が知られており、地元の研究者らによって遺物採集がおこなわれてきました。平成6年度の発掘調査で、16世紀の大窯3基、江戸時代の連房式登窯2基が発見されました。その後、未調査の大窯1基を含む6基と作業場が多治見市史跡に指定されました。中でも小名田窯下1号窯は、安土桃山期以前に作られた窯で、美濃の初期の大窯として知られています。

昭和初期からその存在が知られており、地元の研究者らによって遺物採集がおこなわれてきました。平成6年度の発掘調査で、16世紀の大窯3基、江戸時代の連房式登窯2基が発見されました。その後、未調査の大窯1基を含む6基と作業場が多治見市史跡に指定されました。中でも小名田窯下1号窯は、安土桃山期以前に作られた窯で、美濃の初期の大窯として知られています。

昭和初期からその存在が知られており、地元の研究者らによって遺物採集がおこなわれてきました。平成6年度の発掘調査で、16世紀の大窯3基、江戸時代の連房式登窯2基が発見されました。その後、未調査の大窯1基を含む6基と作業場が多治見市史跡に指定されました。中でも小名田窯下1号窯は、安土桃山期以前に作られた窯で、美濃の初期の大窯として知られています。

昭和初期からその存在が知られており、地元の研究者らによって遺物採集がおこなわれてきました。平成6年度の発掘調査で、16世紀の大窯3基、江戸時代の連房式登窯2基が発見されました。その後、未調査の大窯1基を含む6基と作業場が多治見市史跡に指定されました。中でも小名田窯下1号窯は、安土桃山期以前に作られた窯で、美濃の初期の大窯として知られています。

16世紀の大窯

小名田窯下1号、5号、6号、8号窯の4基が16世紀の大窯です。天目や小皿、すり鉢などが出土しています。このうち1号窯は未発掘ですが、採集遺物から6号窯とほぼ同時期の窯で、16世紀初頭から第1四半期に稼働した窯と考えられています。これは美濃での最初期の

大窯で、小名田窯下窯は編年の指標となっています。また、1号、6号窯からは灰釉天目茶碗(白天目)が発見されています。釉調は少し白濁していることから、一般に「白天目」と呼ばれる伝世品に近く、茶人・武野紹鷗所持の白天目との関係が指摘されています。

また、1号、6号窯からは灰釉天目茶碗(白天目)が発見されています。釉調は少し白濁していることから、一般に「白天目」と呼ばれる伝世品に近く、茶人・武野紹鷗所持の白天目との関係が指摘されています。

また、1号、6号窯からは灰釉天目茶碗(白天目)が発見されています。釉調は少し白濁していることから、一般に「白天目」と呼ばれる伝世品に近く、茶人・武野紹鷗所持の白天目との関係が指摘されています。

また、1号、6号窯からは灰釉天目茶碗(白天目)が発見されています。釉調は少し白濁していることから、一般に「白天目」と呼ばれる伝世品に近く、茶人・武野紹鷗所持の白天目との関係が指摘されています。

また、1号、6号窯からは灰釉天目茶碗(白天目)が発見されています。釉調は少し白濁していることから、一般に「白天目」と呼ばれる伝世品に近く、茶人・武野紹鷗所持の白天目との関係が指摘されています。

また、1号、6号窯からは灰釉天目茶碗(白天目)が発見されています。釉調は少し白濁していることから、一般に「白天目」と呼ばれる伝世品に近く、茶人・武野紹鷗所持の白天目との関係が指摘されています。



小名田窯下窯出土 白天目(多治見市教育委員会所蔵)

さらに、16世紀第2四半期から中葉に築造された8号窯と、その上に築かれた16世紀中葉から後葉の5号窯も発掘されています。この大窯は作業場遺構をとまっています。作業場遺構からは16世紀末の志野丸碗も出土しており、別の大窯が近くに存在した可能性を示しています。また、江戸時代の連房式登窯もみつかり、鉄釉丸碗や御深井丸碗・鉄釉仏花瓶・御深井水注・灰釉菊皿、銅緑釉瓦などが出土しています。

さらに、16世紀第2四半期から中葉に築造された8号窯と、その上に築かれた16世紀中葉から後葉の5号窯も発掘されています。この大窯は作業場遺構をとまっています。作業場遺構からは16世紀末の志野丸碗も出土しており、別の大窯が近くに存在した可能性を示しています。また、江戸時代の連房式登窯もみつかり、鉄釉丸碗や御深井丸碗・鉄釉仏花瓶・御深井水注・灰釉菊皿、銅緑釉瓦などが出土しています。

さらに、16世紀第2四半期から中葉に築造された8号窯と、その上に築かれた16世紀中葉から後葉の5号窯も発掘されています。この大窯は作業場遺構をとまっています。作業場遺構からは16世紀末の志野丸碗も出土しており、別の大窯が近くに存在した可能性を示しています。また、江戸時代の連房式登窯もみつかり、鉄釉丸碗や御深井丸碗・鉄釉仏花瓶・御深井水注・灰釉菊皿、銅緑釉瓦などが出土しています。

さらに、16世紀第2四半期から中葉に築造された8号窯と、その上に築かれた16世紀中葉から後葉の5号窯も発掘されています。この大窯は作業場遺構をとまっています。作業場遺構からは16世紀末の志野丸碗も出土しており、別の大窯が近くに存在した可能性を示しています。また、江戸時代の連房式登窯もみつかり、鉄釉丸碗や御深井丸碗・鉄釉仏花瓶・御深井水注・灰釉菊皿、銅緑釉瓦などが出土しています。

シンポジウム「小名田窯下窯の白天目をめぐって」
講師 佐藤 豊三(徳川美術館参与)
井上 喜久男(元愛知県陶磁資料館 館長補佐)
降矢 哲男(京都国立博物館調査・国際連携室長)
青山 双溪(草の頭窯・市無形文化財「白天目」保持者)
開催日時 令和6年2月17日(土) 午後1時半~3時半
定員 300名(申込不要 直接会場にお越しください)
参加費 無料
場所 多治見市産業文化センター5階大ホール
(多治見市新町1丁目23番地)
後援 総務省
主催 多治見市、一般財団法人自治総合センター



instagram



X

主な参考文献
多治見市 1980『多治見市史』通史編上
瀬戸市 1993『瀬戸市史 陶磁史篇四』
多治見市教育委員会 1997『小名田窯下古窯群発掘調査報告書』
瑞浪市陶磁資料館 2010『瑞浪市陶磁資料館研究紀要第13号』

多治見市文化財保護センター
企画展パンフレット「小名田窯下窯」

展示期間・場所: 令和6年1月29日(月)~6月21日(金)

多治見市文化財保護センター展示室
発行: 多治見市教育委員会・文化財保護センター
〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘10-6-26
TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033
URL <https://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/>
発行部数: 1000部(印刷費用 69,000円)(税抜き)

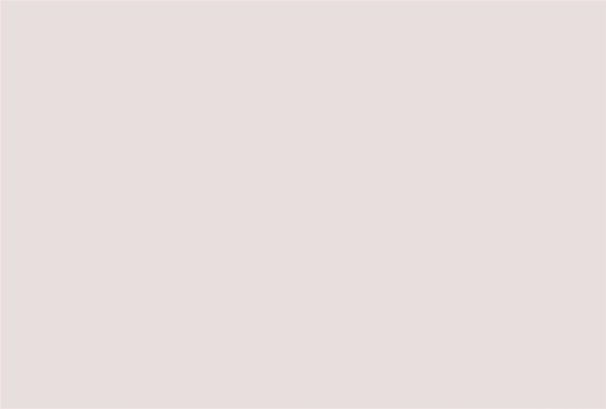
しろてんもく

白天目とは

一般的にいう天目は、鉄釉をかけたもので、黒または茶褐色系の喫茶用茶碗のことを指します。中国浙江省北部の天目山で使われており、日本の留学僧が持ち帰り定着したとされます。低く小さな高台、口縁部は「すっぽん口」といわれる形で、高台とその周りは土が露胎していることが特徴です。

福建省建窯で作られた天目は「建盞」と呼ばれ、日本では茶人たちの間で珍重されました。日本でも13世紀末に瀬戸窯で天目の生産が始まり、15世紀には美濃窯でも焼かれるようになりました。

その中に、少数ながら灰釉や長石釉をかけた白色系の天目茶碗があります。鉄分が少ない胎土に灰釉をかけて白く見せようとしたのが始まりと考えられ、長石釉が登場するとそれに変わっていったと考えられています。特に15世紀末から16世紀にかけての大窯期に焼かれた白色系の天目茶碗は「白天目」と呼ばれています。



国重要文化財　白天目　室町時代・16世紀

じょうおう

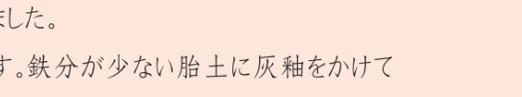
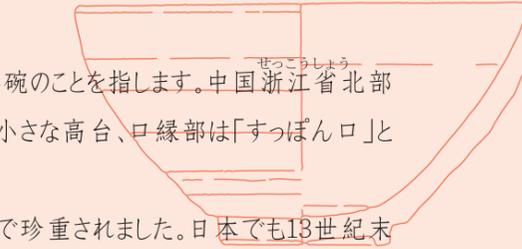
紹鷗所持白天目

伝世品では、茶人・武野紹鷗が所有していた三碗(尾張徳川家所蔵、加賀前田家旧所蔵、香雪美術館所蔵)がよく知られています。

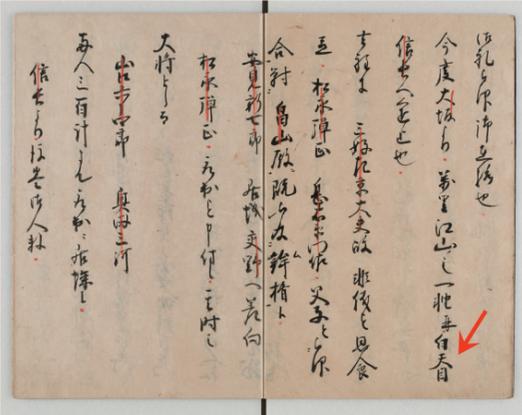
尾張徳川家所蔵の白天目は、紹鷗の孫である仲定から尾張徳川家初代義直に献上されたもので、国重要文化財となっています。胴部は緩やかな丸みがあり、見込や胴には美しい淡緑色の釉溜まりが見られます。高台は輪高台で、高台脇の土見せの部分は微小な石の混じったさつくりとした土で、年代を経て茶色を呈していますが、もとは白色であったことが想像されます。

また、加賀前田家旧所蔵の白天目は「薬師院」宛の千利休消息が添うもので、国重要文化財となっています。紹鷗から本願寺にわたり、織田信長、豊臣秀吉を経て後に加賀前田家に伝来しました。釉調は黄味がかかった白色で、釉薬の溶けがよく、全体に粗い貫入が入っています。見込や外側の釉際に釉溜まりができていません。『信長記』元龜3年(1572)の項には本願寺から信長が譲り受けた記録が残されています。

香雪美術館所蔵の白天目は紹鷗から豊臣秀吉、細川忠興に伝来したもので、紹鷗所持の三碗の中ではやや堅く焼きしまっています。全体にやや黄味を帯びた白釉が^かかり、釉溜まりは^かオリブ色に発色しています。



小名田窯下窯出土　白天目（多治見市教育委員会所蔵）



『信長記第五巻』（岡山大学付属図書館所蔵）

茶会記などの史料にみられる白天目

白天目は茶会記などの戦国時代の史料にたびたび登場します。天正元年(1573)11月に織田信長が催した茶会をはじめ、天正15年(1587)に豊臣秀吉が京都北野天満宮で催した北野大茶湯でも「白天目」や、白天目と思われる天目の名をみることができます。

総じて特別な茶会で用いられることが多く、信長や秀吉が所持したことからも、名碗として珍重されていたことがわかります。また、信長の一代記である『信長記』には、本願寺が和睦のために白天目を信長に進上したことも記されており、贈与の品としても重要な役割をしていました。

和暦	西暦	原文に書かれた白天目	亭主	出典
弘治 4 年 1 月 21 日	1558	中坊白天目、但、色白はなし、土よし	納や宗久	天王寺屋会記
永禄 9 年 1 月 11 日	1566	伊勢天目、白色	道巴	天王寺屋会記
元龜 3 年 3 月 12 日	1572	白天目(本願寺から信長に進上)		信長記第五巻
天正元年 11 月 23 日	1573	白天目、従大坂進上之刻也(京都妙覚寺茶会)	信長	天王寺屋会記
天正 3 年 10 月 28 日	1575	白天目(妙光寺茶会)	信長	信長記巻之中
天正 9 年 1 月 20 日	1581	瀬戸白天目	宗及	天王寺屋会記
天正 13 年 3 月 5 日	1585	白天目(大徳寺大茶湯)	秀吉	天王寺屋会記
天正 14 年 2 月 16 日	1586	瀬戸白茶碗	郡山曲音	松屋会記
天正 15 年 1 月 3 日	1587	白天目(大坂城茶会)	秀吉	神屋宗湛日記
1 月 18 日	1587	白いせ天目	池田伊予	神屋宗湛日記
10 月 1 日	1587	白天目(北野大茶湯)	宗及カサリ	松屋会記
天正 20 年 11 月 14 日	1592	白天目	秀吉	天王寺屋会記
慶長 4 年 12 月 2 日	1599	白ヤキ/茶ワシ	郡山甲田法順	松屋会記
慶長 6 年 4 月 18 日	1601	白茶碗瀬戸	古田織部	松屋会記

白天目のこれまでの研究

白天目については、これまで産地や釉薬についてさまざまな議論がされてきました。伝世品の白濁した表面の様子から、釉薬は志野に使われる長石釉であるという説に始まり、近年では長石釉のみではなく、灰に長石が混ざった釉薬を高温で焼成したという説と、灰釉のみという説に分かれてきました。

荒川豊蔵は、紹鷗所持白天目を「志野で一番古い天目茶碗として、長石を使った志野の源流」と規定しました※1。

林屋晴三は徳川美術館の白天目の焼成窯について、「小名田尼ヶ根窯からも釉膚に青味のある似た茶碗が出土している」と美濃窯産を示唆し、「白天目は天文ころの美濃産である。釉薬については土灰の混じった長石釉薬である」と述べ、灰釉に長石を混ぜた「灰志野」であるとしました※2。また、檜崎彰一は、「基本的には灰釉であり、白釉化した理

由は高温によって灰と長石釉が分離し

たもの」で「一種の灰志野」とし、「のちの志野

の源流をなした」と志野の初現形態と位置付けてい

ます。古川庄作は「白天目茶碗は、純然たる長石単味の志野ではないが、粗い貫入の入ったまだ灰分を含んだ灰志野釉」※3であるとし、大河内定夫は白天目は青磁釉系の灰長石釉と結論付けています※4。一方で矢部良明は、「16世紀初頭に作られた瀬戸美濃の白天目は、灰釉で白を狙ったもので、白くても志野ではない」としました。

[[] ※1 1963「日本のやきもの8・美濃」淡光社

[[] ※2 1971「日本の陶磁3」中央公論社

[[] ※3 1977『美濃―茶陶の美 志野と織部』

[[] ※4 1978『金輪叢書』


小名田窯下窯採集白天目陶片（多治見市教育委員会所蔵）